

詩篇116篇

《御名を呼び求めよ① 叫び》

- 1 私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。
- 2 主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。
- 3 死の網が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあった。
- 4 そのとき、私は主の御名を呼び求めた。「主よ。どうか私のいのちを助け出してください。」
- 5 主は情け深く、正しい。まことに、私たちの神はあわれみ深い。
- 6 主はわきまのない者を守られる。私がおとしめられたとき、私をお救いになった。
- 7 私のたましいよ。おまえの全きいこいに戻れ。主はおまえに、良くしてくださったからだ。
- 8 まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました。
- 9 私は、生ける者の地で、主の御前を歩き進もう。

《御名を呼び求めよ② 感謝》

- 10 「私は大いに悩んだ」と言ったときも、私は信じた。
- 11 私はあわてて「すべての人は偽りを言う者だ」と言った。
- 12 主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。
- 13 私は救いの杯をかげ、主の御名を呼び求めよう。
- 14 私は、自分の誓いを主に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。

《御名を呼び求めよ③ とりなし》

- 15 主の聖徒たちの死は主の目に尊い。
- 16 ああ、主よ。私はまことにあなたのしもべです。私は、あなたのしもべ、あなたのはしめの子です。あなたは私のかせを解かれました。
- 17 私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。
- 18 私は自分の誓いを主に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。
- 19 主の家の大庭で。エルサレムよ。あなたの真ん中で。ハレルヤ。

本篇が書かれた目的が、公的であったか個人的であったかは議論のあるところです。背景にあるのは、詩人が何らかの苦難から救い出されたことに対する篤い感謝の思いです。公的なことであるならば捕囚からの解放、個人的なことであるならば病からの解放と考えられるでしょう。詩人は苦しい状況下にあったとき、この苦境から救い出してくださった暁には「感謝のいけにえ」（17節）をささげると主に誓っていたようです。その救いが実現し、彼は狂喜のうちに神殿に赴き、誓いを果たしているのです（14節、18節）。

色づけしたように、全体を貫いているフレーズは「**主の御名を呼び求める**」であり、三つに区分けしたそれぞれの中に見出されます。ヘブル思想において、「名前」はその人自身をも、その性質をも表します。主を呼び求めるとは、その真実と愛をもって自分を救い出してくださいとの願いです。

1～9節

冒頭の1節は、「**私は主を愛する**」と訳されていますが、原文には「主を」という目的語がありません。シンプルに「私は愛する」と宣言されているだけなのです。敢えて不完全な言い方をするにより、かえってこの一文が強調されています。愛する対象は隠されているのですが、「読者よ、私が誰を愛しているか読みとれ！」という詩人の心の声が聞こえてくるようです。

詩人が置かれていた状況は「**死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあつた**」（3節）という表現から理解することができますでしょう。死ぬほどの病か、あるいは敵対者によって命を狙われていたか。6節では「**私がおとしめられたとき**」と言われているところから、彼が何者かによって中傷されていたとも考えられます。病気に罹ると、心配されるどころか、「あいつは何らか神に背くことをした結果あのような目に遭っているのだ」と噂されてしまう。下手に病気にすんなれない価値観の下に生きていました。

2節と3節で「呼び求めた」と繰り返されています。ここで詩人は主のご性質を思い起こしています。「**主は情け深く、正しい。まことに、私たちの神はあわれみ深い**」（5節）と。苦しみ祈る者に対して、主は目を向けてくださる。主の憐れみは不従順な民に対して注がれましたが、旧約聖書の記事が繰り返し示しているように、主は罪深い者がご自分に立ち返ることを常に求めておられ、悔い改めるときに豊かに赦しをお与えになります。あのニネベの町に対してすら「**まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか**」（ヨナ4:11）と言われました。そして、預言者ヨナはこの主の性質を知っていたからこそ、主の命に逆らってタルシシュへ逃れたのです。「**私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです**」（ヨナ4:2）。

主が詩人の祈りに応えてくださったことが、様々な表現で言い表されています。「**私をお救いになった**」（6節）、「**主はおまえに、良くしてくださった**」（7節）、「**私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました**」（8節）。ここには、詩人の個人的な経験が色濃く現れています。

10～14節

詩人が苦しんだ経験が更に綴られていきます。「**私は大いに悩んだ**」（10節）、「**『すべての人は偽りを言う者だ』と言った**」（11節）。ここには詩人の深い人間不信が現れています。人が信用できなくなることが次々と身に降りかかったのでしょうか。裏切られたか、金銭的に騙されたか、病を見た友が去って行ったか。しかし、すべての人を失ったとしても、失われないも

のがあった。それは主との関係でした。主はどんなときにも真実であり続けてくださった。

「ことごとく私に良くしてくださった」(12節)と、振り返って見たときにいつも自分と共にいてくださった主を見出したのです。自分は一人で歩んでいたのではなかった。

「救いの杯」(13節)とは「感謝の杯」であり、神殿でぶどう酒がささげられたのでしよう。これは詩人が、救われた暁にはそうしように心に決めていたことでした。「自分の誓いを主に果たそう」(14節)。果たせるときがついにやってきたのです。ここでも本篇を特徴づける「主の御名を呼び求めよう」(13節)という表現が出てきますが、ここでは既に問題が解決した上での呼び求めです。誓いを果たそうとしている自分と対面してくださるようにとの呼びかけと言ってもよいでしょう。

15～19節

15節で唐突に「聖徒たちの死」ということばが出てくるのは何故でしょうか。今や詩人の目は、自分だけの問題ではなく、民全体へと向けられています。捕囚で苦しみ、祖国を再び見ることなく死んでいった同胞を思っているのでしょう。まるで見捨てられたかのように死んでいった仲間たち。しかし、彼らの最期がどのようなであっても、主は彼らに対する慈しみを捨ててはおられなかった。詩人は彼らの分も賛美しようとしているのです。

「私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。私は自分の誓いを主に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で」(17-18節)という二つの節は、13～14節をそっくりそのまま反復しています。先には個人的な感謝と誓いを主にささげたのに対し、ここでは亡き友の想いを背負って感謝と誓いをささげているのでしょう。「主の御名を呼び求めます」というのも、大切な仲間たちの思いと自分の思いとを重ね合わせているかのようです。

最後に「主の家の大庭で。エルサレムよ。あなたの真ん中で」(19節)とあるのは、民がエルサレムに戻ってきたこと、神殿での礼拝が回復していることを明らかにしているでしょう。主の約束は果たされた。解放の時が来たのです。詩人は個人的な問題から解放された自分と、民の解放とを一つとして見ていました。詩篇の多くはこのような構造になっています。私たちの目は自分のことばかりに固執しやすいものですが、視野が広げられるとき、実は仲間と共にあること、主が民と共にいてくださることに気づく。孤独な戦いに感じられていたことが、誰かと一緒に戦っていたことに目が開かれるのです。